

ヴァレリー「ナルシスのカンタータ」試訳：フランス韻文詩をどう翻訳するか

鳥山，定嗣
名古屋大学大学院人文学研究科：准教授

<https://doi.org/10.15017/6632410>

出版情報：Stella. 41, pp.113-140, 2022-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu

バージョン：

権利関係：



ヴァレリー「ナルシスのカンタータ」試訳

——フランス韻文詩をどう翻訳するか——

鳥 山 定 嗣

外国語で書かれた韻文詩をどのように日本語に翻訳するか。これは古くからあると同時にいまなお古びない問いである。フランス詩について言えば、上田敏『海潮音』（1908）を嚆矢とし、永井荷風『珊瑚集』（1913）、堀口大学『月下の一群』（1925）と続く訳詩集が、文語体から口語体へ、韻文調から散文調（ないし自由詩風）へと推移したフランス近代詩翻訳の方向性を端的に示している。またこの変遷が、文語定型詩から文語自由詩をへて口語自由詩へと展開した日本近代詩の流れと密接に関連しつつ、それに多大な影響を及ぼしたこともよく知られていよう。今日の訳詩は口語体自由詩風、すなわち詩行単位を模倣しつつ、音数律は自由というスタイルが一般的だが、韻文詩をどう訳すかという問題は、翻訳論の盛んな昨今あらためて問われている。

フランス詩の翻訳と受容においては、特にランボーの詩 *Le Bateau ivre* をめぐってこの問題が論じられてきた。宇佐美斉は、上田敏の文語体律動訳と柳澤健の口語体散文訳を比較対照したうえで、両者を統合する試みとして中原中也訳を位置づけている¹⁾。中地義和は、小林秀雄訳と中原中也訳を比較し、前者が律動的な韻文訳に向かうのに対して、後者は律動を抑えた散文調に向かうと指摘し、十指に余る同詩篇の邦訳を概観しつつ、みずから新訳を企てる意義について次のように述べている——

中原中也以後、定数律から離れて口語自由詩としての訳が始まったが、言文一致の平明さの要請は相当程度満たされたのとは裏腹に、訳詩が散文化する趨勢はとどめようがなかった。今日なおこの詩の新訳が企てられることに意義があるとすれば、それは口語自由詩の訳詩のなかに、原文の律動を近似的あるいは代替的に喚起するある種の音楽性、それも古めかしくない音楽性を創出する可能性のなかに見出されるものだろう。²⁾

「訳詩が散文化する趨勢」は原詩の意味に忠実であろうとする翻訳者の姿勢と

ともに、音数律からの解放に可能性を見出した日本近代詩の趨勢ともあいまって、今日の訳詩ではしばしば定型韻文詩も自由韻文詩も区別がつかないほどである。こうした状況下にあつて、「口語自由詩の訳詩」に「原文の律動を近似的あるいは代替的に喚起するある種の音楽性」を付与しようとする試み、たしかにこれこそ韻文詩の翻訳が目指すべき道であると私も思う。中地が「古めかしくない音楽性」と特に断っている理由は、当のランボーの詩が^{アレクサンドラン}12音節詩句の外枠（1詩行12音節）を保ちながら、同時にその定型性を内側から崩す（定まった句切りを乱す）非定型詩句の新しさを備えているためである。そのような定型性と非定型性の混淆したリズムを日本語に移す困難は、まさしくこの問題を解決すべく *Le Bateau ivre* の韻文訳に苦心した上田敏の未定稿4種に顕著にうかがわれる³⁾。このランボーの詩のような非定型12音節詩句は形式面を考慮して翻訳するのが最も難しいものであると言えよう。

ところで、フランス韻文詩の日本語訳全般について考えるならば、まずは純然たる定型韻文詩をどう訳すかという問いから始めるのが妥当であろう。*Le Bateau ivre* のような詩は定型保持と定型破壊の両面を併せ持つ、いわば定型韻文詩の傑出した変種であり、標準の定型韻文詩の訳し方を定めたうえでなければ取り組みがたい困難を孕んでいる。今日、フランス語の定型韻文詩を訳すにあたり、その「律動を近似的あるいは代替的に喚起する」ためにはどうすべきだろうか。とりわけ現代詩の大半を占める自由詩と区別して韻文詩を訳そうと試みる場合、どのような方針をとるべきか。フランス語韻文詩の定型性を支えているのは音節数に基づく韻律と詩行末尾の脚韻である。日本語訳において脚韻の効果を移植しようとすることはマチネ・ポエティックの試みの後では難しいと言わざるを得ないが、音節数に基づく韻律を工夫する道はいまだ開かれているのではないか。殊にフランス詩の韻律は、強弱リズムの反復に基づく英詩やドイツ詩などと異なり、音節数と句切りに基づくため、近似的なりズムを日本語に移す可能性が比較的高いように思われる。

韻文詩の定型性を可能なかぎり訳詩に反映させようとする試みは、詩の翻訳において「原詩への忠実さ」とは何かという根本的な問いとも結びつく。「詩は翻訳不可能」とはしばしば耳にする絶望的な言辞だが、これは裏を返せば、詩における形式の重要性を裏づける言葉にほかならない。翻訳において原テキストへの「忠実さ」が最も重要視されるのは当然だが、詩の翻訳においては、リ

ズムや脚韻といった形式面の「正確さ」を求めることが不可能に近いために、内容面の「正確さ」に偏りがちである。『海潮音』以来のフランス詩邦訳の歴史をふりかえると、時代を経るにつれて内容把握の精度が高まるのとは裏腹に、形式的配慮はむしろ薄れていくように思われる。とりわけ再訳や改訳の試みにおいては既訳よりも「正確」たらしめるのが必然であり、その「正確さ」はおのずと意味内容に集中し、形式的配慮はしばしば副次的にならざるをえない。だが、そもそも詩の翻訳における「正確さ」、原詩への「忠実さ」とは何か、あらためて問う必要があるのではないか。詩人の努力はしばしば意味と形式の調和に向けられている。たとえばヴァレリーは詩という言語芸術を「音と意味のあいだの長引くためらい」と定義し、定義しえないその本質を「詩句が言うこと〔内容〕と詩句の有りよう〔形式〕とのあいだの定義しがたい調和」に見出している⁴⁾。この観点からすれば、翻訳不可能という理由で形式を捨象し、もっぱら内容への忠実さを目指す翻訳は「裏切り」にほかならない。真の意味での「忠実訳」⁵⁾は、原詩の内容以上に原詩の全体を大切にし、原詩のなそうとしたことに可能なかぎり近づこうと努めるものではないか。

詩をどう訳すか、これはきわめて今日的な問いでもある。AI 技術が目覚ましく発展し、自動翻訳の精度が飛躍的に向上する昨今、私たち人間が目指すべき翻訳とはどのようなものか。ある言語から別の言語へ特定の意味内容を正確に移しかえる作業は、その「正確さ」において、AI が人間を凌駕する日は遠くないだろう。文学テキストの翻訳においてはまだ人間のほうが優れているかもしれないが、その優位はいつまで保たれることだろう。私たち人間が AI による自動翻訳とは別の道を志向すべきだとすれば、それは分析ではなく総合の道、すなわち意味と形式の双方に同等の重要性をみとめ、可能なかぎり原詩の全体に忠実な翻訳を目指すべきではないだろうか。

本稿では、以上の問題意識をもって、ヴァレリーの韻文詩「ナルシスのカンタータ」(1939)の新訳を試みる⁶⁾。1幕7場からなる韻文劇で、詩型はさまざまな音節数の詩句を自由に組み合わせる混淆詩 vers mêlés であり、ラ・フォンテーヌが『寓話』で用いたスタイルに近い。総詩行数は502行⁷⁾、12音節詩句がその大半(319行)を占め、次いで8音節(55行)と6音節(53行)、10音節(27行)と5音節(20行)が順に多く、さらに少数ながら9音節、7音節、4音節、3音節、2音節、1音節も含まれる。原詩と同じく試訳でも、行頭字下げ

によってこれらの詩句を区別し、12音節詩句と10音節詩句については定まった句切りをなるべく再現するよう心がけた。

原詩の12音節詩句はほぼすべて古典的な定型に適っており⁸⁾、中央の句切り^{セジュール}によって等分される6-6のリズムを保っている。10音節詩句も同様に4-6の定型リズムを備えている。が、こうした定型リズムを日本語訳に移しかえるにはどうすべきか。上田敏以来、齋藤磯雄や井澤義雄など⁹⁾、フランス詩の定型12音節詩句^{アレクサンドラン}の韻律を日本語の音数律とりわけ七五調に置き換える文語韻文訳の伝統があるが、文語体の古めかしさに加え、音数律を整えるために埋め草を入れるなどの弊害を免れなかったこの道を、今日ふたたび辿ることは難しいだろう。が、外国語詩の古典的なリズムを近似的・代替的に日本語で再現しようとするならば、やはり日本語の伝統的なリズムを形成してきた五音と七音を活用するのが最適ではないか、音数律のくびきをある程度ゆるめた律動的口語訳の可能性はまだ残されているのではないかと思われる。

本稿の「ナルシスのカンタータ」試訳では、詩句の意味内容への忠実さと定型的なリズム感への配慮を天秤にかけ、1音節から12音節にいたる混淆詩句の多様性をなるべく原詩に近い形で示そうと試みた。とりわけ本作の大半を占める定型12音節詩句^{アレクサンドラン}の訳に意を注ぎ、その最大の特徴である等分リズム(6-6)を近似的に再現するために、五音と七音の組合せを活用することに加え、中央の句切りにあたる箇所^{セジュール}に空白を設けた。もちろん空白などなくてもリズムは言葉に内在するが、空白の挿入はリズムの形成と伝達に寄与し、訳詩における形式的制約としても有効に機能すると思われる。また句読点については、句点・感嘆符・疑問符・中断符はそのまま移す一方、読点に相当するものはすべて空白に置き換えた。フランス語のヴィルギュルと日本語の読点は必ずしも等価ではなく、日本語ではヴィルギュル(,)とポワン・ヴィルギュル(;)の区別もできないことから、読点を忠実に反映させるよりも空白によってリズム形成をうながすほうが有益と判断したためである。

「ナルシスのカンタータ」は1939年、著者と友人のための非売品として刷られた後、同年9月『メランジュ』初版豪華版に収められた¹⁰⁾。その後、1941年1月『新フランス評論』第323号巻頭に掲載、同年5月『メランジュ』増補普及版、1942年『詩集』所収となり、翌年には同じくガリマール社から単独で刊行された。タイトルは当初、定冠詞付きのLa Cantate du Narcisseであった

が、『メランジュ』普及版以降、定冠詞 *La* は削除される¹¹⁾。なお、この詩は詩文集『メランジュ』のなかで質量ともに群を抜いた作であり、初版豪華版では詩文集のほぼ中央に配置され、前後にヴァレリー自身によるデッサン（いずれもナルシスに関連）を添えるこの詩はいかにも集中の珠玉という趣を呈する一方、『メランジュ』普及版以降は詩文集の増補に伴い、巻尾を飾ることとなる。



ヴァレリーによるエッチング（『メランジュ』初版豪華版，1939 年）

ナルシスのカンタータ

リブレット
台本ジャン・ヴォワリエに¹²⁾

エピグラフ

おお 似姿よ！…… とはいえ私自身より完璧な
 はかなくも不滅の姿 目の前にかくもさやかな
 ほの白い真珠の手足 それにこの絹の髪
 愛するまもなくたちまち 闇にまぎれてしまうのか
 おお ナルシス 早くも夜が 私たちを引き裂き
 果実を切り割く鉄の刃を 二人のあいだに入れるのか！

(『魅惑』の「ナルシス断章」)

はしがき

この小品は、作者が遠い昔と近い過去に公表したふたつの状態の『ナルシス』¹³⁾とはまったく別の、まったく異なるものである。

これは1938年4月から11月にかけて、ジェルメース・タイユフェール夫人からの依頼に応じて、この傑出した音楽家が作曲したカンタータのための台本として書かれたものである。

しかし、本テキストは一部、楽曲化されたテキストよりもいくらか発展しているところがある。

登場人物

ナルシス

第1のナンフ

他のナンフ3人¹⁴⁾、エコー

舞台は森のなかの明るく開けた場所

中央に泉¹⁵⁾

第1場

ここかしこにナンフたちの姿

第1のナンフ

ナンフたち ナンフたち 生き生きとしたナンフたち……

瑞々しい水の娘たち

清く流れる私たちの戯れは

私たちの母なる波の面^もに 〈太陽〉の神を楽しませ……

第2のナンフ

むなしい！…… むなしい！……

ナンフたち 生き生きとしたナンフたち

私たちが浮かれ騒いで 葦を震わせてもむなしい

どれほど元気に戯れても ただただ水を乱すだけ

この水辺に私たちのための愛はない……

第3のナンフ

ああ！ 生き生きと瑞々しい娘たち

たったひとつの〈太陽〉の火を 味わうだけでは物足りない

戯れて〈陽〉を楽しませるのは 愛を味わうことではないわ。

来る日も来る日も日を失う私たち

愛のないまま……

第4のナンフ

でも 私は自分が美しいと思う！……

第1のナンフ

私はもっと美しい！……

第2のナンフ

私は！……

第4のナンフ

これほどしなやかな娘はなく

これほど澄んだ肌はない……

第2のナンフ

むなしい むなしい！

第1のニンフと第4のナンフ

私たちの銀の肩は 波打つ私たちの髪は
ただ光のためだけに 弄ばれるものなのかしら？

第2のナンフ

むなしい むなしい……
ナンフたち 誇り高いナンフたち
美しくてもむなしい…… 私たちの祈りもむなしい！

第3のナンフ

この私よりも恋人を 上手に抱くひとがあるかしら？

一同

私！

第2のナンフ

一体誰に愛されるのでしょうか これほど美しい私たちは？

第1のナンフ

それは 最も美しい男……
ナルシス！……

一同

ナルシス！……

第2のナンフ

ナルシスは私たちに見向きもしない……

第1のナンフ

私たちより美しいというの？

第3のナンフ

水に映った自分に見惚れて ひざまづいて崇めている……

第4のナンフ

穏やかな水の空に浮かぶ 自分の上に身をかがめて
シュロの葉のようにしなやかに……

第1のナンフ

夕暮れどきに戻ってきて 彼はその身を愛して嘆く
澄んだ水に隠れた私は その声を聞いて泣いてしまう
あまりにも優しい彼の声音が
死にたい気持ちにさせるから……

第2のナンフ

ああ…… 姉さんたち¹⁶⁾ 死ぬですって？…… 私たちは不死の身な
[のに
むなしくも むなしくも 不死にして美しい
私たちには 愛もなく 死もない。
欲望も苦しみも 私たちには果たされず
私たちはたえずこの定めに戻り……

一同

おお ナルシス？ ナルシス！……
来たわ…… 隠れましょう…… 木の葉がさやぎ
鳥がみんな逃げてゆく……

第1のナンフ

潜るのよ 〈あなた〉！……
私はこの檻^{ふな}になるわ！……

第3のナンフ

私は葦の草むらに
とどまってよく見ていよう！……

一同

早く…… 早く！……

(全員ピアニッシモで)

愛 実りなき愛 悦びの望みなき愛
望みなく私たちは愛する…… 望みなくわが身を愛するがいい
美しく悲しいナルシスよ……

第2場

ナルシス、ひとり

ナルシス

〈太陽〉よ…… ただ君¹⁷⁾とともに 〈君〉のようにただひとり¹⁸⁾ 〈太陽〉よ

〈君〉¹⁹⁾のその誇り高さは 私の秘かな決意にかなう
 〈君〉²⁰⁾はまったき天の道に 並ぶものなど認めはしない

比類なき〈太陽〉よ

私たちの運命の 似通うさまを認めてくれ
 泉に向かうナルシスの 永劫回帰を讀えてくれ
 水面に映るその姿は 自己への愛に捧げられ
 みずからの美をことごとく 知り尽くそうとする

わが運命はひたすらに

わが愛の力に従うのみ²¹⁾。

いとしい体よ ただ君の力にわが身をゆだねよう
 静謐な水に惹かれるままに わが身に腕を差し伸べよう
 目のくらむほど純粋な この陶醉には抗えない。
 おお わが〈美〉²²⁾よ 何ができよう 君が望むこと以外に？
 われとわが身に会うために 自分の影と木の葉を踏み
 一步一步踏むたびに その重みをひしと感じる。
 おお ナルシス 〈私自身〉よ 君の目によって私の目に²³⁾
 私を迎える〈同じもの〉よ 私たちの目の悦びよ
 光り輝く葦の茂みの さざめく黄金^{こがね}に打ち伏して
 かけがえのないわが肉体の 優しい重みで押しつぶす
 もっと近くで君を見て 私にもっと微笑むために……
 何か言ってくれ²⁴⁾ 空に浮かぶ清らかな微笑みよ
 おお！…… 黙った〈口〉よ なんと見事にこの口は
 敬虔な唇が もっとも身近な神々に

捧げる願いをかたどることか！²⁵⁾

さあ思い切って…… この私は愛情に満ちた神ではないか
 選ぴとった完璧な体が おのれの秘かな陶醉に

応えるさまを見ている〈精神〉ではないか？

そうだ この眼差しが愛撫する美しい子よ²⁶⁾

魂の私は 君を司る力²⁷⁾であって

おのれの欲望が 君のさやかな姿形と

奇しくも一致することに驚いている

私に好かれようとする従順なその姿……
 おお わが〈欲望〉よ わが欲望にささやけ
 おまえに触れるこの唇はどれほどの渴きを
 感じるのか 捉えられない自分に対して！……
 〈光〉²⁸⁾の子よ 水影よ 夢まぼろしか まやかしか
 いとしいナルシスよ もし私の死を望むなら
 夢まぼろしのままであれ 欲望のままであれ！……

だが〈波の薔薇〉よ²⁹⁾
 おお〈口〉よ 〈水面〉^{みなも}に
 私がかくちづけすれば
 世界の面が^{おもて}
 この吐息におびえる……
 たったひと息
 漏らすだけで
 消え去ってしまうだろう
 青く光る水面^{みなも}から
 私の愛した姿が
 また空も森も
 また〈波の薔薇〉も……

第3場

ナルシス、
 ついでひとりのナンフ、はじめは姿が見えない

ナルシス

空よ おお わが空よ！…… なんていう乱れよう おお 致命的な
 [変わりよう！……]

闇^{さかなみ} 逆波^{さかなみ} ざわめき…… どうになってしまうのか 〈束の間〉の
 恍惚^{こがね}と黄金の時？…… この身をあざける笑い声？……
 渚^{なみさ}をこえて波がおののく……

水晶の奥底で とある魔物が身を震わせる……
 わが静謐な泉には この獣^{けだもの}が眠っていたのだ
 泉はにわかに 異様な嵐に襲われる
 澄みきった水面が 激しく揺らいで私を砕く
 波が突然逆上し なにもかもが入り乱れる！……
 おお 忌まわしい荒々しさ³⁰⁾
 思いもよらぬこの騒乱のせいで

孤独よ 偶像よ 静寂よ
 わが似姿の悦びよ
 私を見つめ返してくれた美しい目よ
 私は君を失い すべてを失った！……
 ああ！…… わが究極の願いの 唯一無二の対象よ
 君はもういない ナルシスよ…… もういない……

(ここで第1のナンフが泉から現れ、
 蒸気を発していた泉はその中からくっきりと姿を見せる)

なんだ！…… 〈魔物〉だ！…… ^{みなわ}水泡からぬっと現れる……
 魔物？…… 美の魔物…… 浮かび上がるみやびな身体……
 もしかして？…… 君か 〈君〉なのか ナルシスよ
 ざわめく波から きらめく霧から 現れるのは？
 君なのか？ 澆刺と…… 全身…… 髪から爪先まで
 太陽の光のしずくのダイヤモンドを身に帯びて
 君は冷たい水によって 身を焦がす火に供されたのか？³¹⁾
 おお けがれなき現れ 奇跡の目覚め
 おいで…… 君…… 君と同じ私のもとへわが身を愛しにおいで……

ナンフ (完全に姿を現して)

同じではないわ ナルシス…… 違う魅力を見てください
 あなた自身に恋い焦がれても 涙をこぼすだけでしょ。

ナルシス

なんだ。いまいましい…… 呪わしくも見間違えて
 嫌なものをもう少しで愛してしまうところだった！

ナンフ

嫌う心も時として 姿を見ると変わります。
 あなたは美しい ナルシスよ ^{うぬほ}自惚れるのも当然なほど
 でも 魅力あるこの体が 素晴らしくも単調な
 あなたの自己の気を引くことを許してください。
 つらいのです 夕闇のなか あなたの嘆きを耳にするのは
 懸命に自分自身をあざむく愛³²⁾に苦しむひとよ
 あなたのその魂から 忌まわしい願いを消そうとして
 これほど近くで身を焦がす女がいるというのに。
 お分かりになるかしら むなしい希望を抱くあなたに

私たちの違いがもたらす 愛の豊かさがどれほどか？
 あなたひとりの美しさは あなたに涙を約束するだけ
 私は果実をもたらすわ あなたはその花を失うけれど……
 私のなかに見てください まったく違う美しさを
 あなたの優美に劣りはしない私の優美は
 あなたの宝を求めるあなたの愛を 叶えることができるのです
 私の宝を求める愛と 優しく混ぜ合わせることで……

ナルシス

あなたのせいで私の孤独は台無しになった。

ナンフ

あなたは波を愛していただけ 私は生身の存在です。
 私の身は水鏡に 囚われてなどいないのです
 光にもまざる私は 夕べに死ぬこともありません。
 たとえ 夜のさなかでも 昼にもまして熱烈に
 わが身を焦がす炎を あなたに教えてあげましょう
 あふれんばかりのこの愛情は 闇にも決して消えません。
 でも君 自己愛のほか愛を知らなかった君は
 水影に浸りきったまま この愛の虜を蔑んで
 私がまったき喜びだとは 思ってもみないのね
 その腕でこの肉体を ひしと抱きしめたなら
 抱き寄せたこの体を 自分自身にしてしまつて
 ナルシスにさらに愛しい ナルシスを感じれるのに……
 その冷えきった唇を 私の口で消してあげるわ
 しんしんと冷たく澄んだ 経帷子みなもの水面に浮かぶ
 唇を ただ自分だけに向けられる君のくちづけを……

ナルシス

気安く呼ぶな！…… 欲しいのは混じりけのない愛³³⁾ だけだ
 われとわが目に目を映し 自分自身と自分の間で
 もっとも秘かな願いごとを 交わすのに酔いしれる愛……
 私はひとり。私は私。モフ私は本物…… あなたを嫌う。

ナンフ

もし私があなた自身を 超えようとしたのなら
 君よりも 君にまさつて 君を愛する私が 君となり

ナルシスとなって恋人を 抱きしめることができたなら？

ほら…… この肩に触れてみて 私は全身震えるわ……

そう 君の手で私に 狂おしい熱を押しつけてほしい

なめらかな波よりもっと 私の胸はやわらかいのよ

この胸で君の苦悩を 葬ってあげるから。

この花の香りをかげば 君は青ざめ羨むわ

君の身に命の力が すこしでも残っているなら……

この花を奪ったものは 誰ひとりいないのよ

私の姿を見たのは空だけ それも時おり私が

〈水を崇める君〉を待ちぶせた あの葦の茂みごしに……

あのとき 君の目が自分の夢を じっと見つめているあいだ

私の体は矢のように 飛んで水にもぐりこみ

隠れたの…… 一気に この身は欲望となって

私の快感がただよう 満ち満ちた水のなか

すばらしい姿形を 生みだす力をふりしほり

全身で手と足を 自由自在に動かして

あらわな仕草を惜しみなくふりまいていた 音も立てずに

波を 光の面と深い闇に切り分けながら。

ああ！…… 豊かな水の広がりやを 掻き抱いてもむなしいこと……

ただ波と結ばれるだけで 我を忘れて力尽き

狂い乱れたこの愛を ただ掻き立てただけだった

日の光から遠ざかれば 紛らわせると思ったけれど……

ああ！…… 私を信じて！…… 自分自身を愛しても仕方ないの

[よ……

愛してる…… 愛してる！…… 分かるでしょう ナルシス どんなに

[私が愛しているか

君が望めば この水辺に どんな瞬間が息づくことか

私たちの美はお互いに 自分の願いを組み合わせるわ

私たちの心も…… なんて冷たい目つき 美しい目！ なんてつれな

[い

顔を向けるの！……

ナルシス

あなたが嫌いなんだ 忌まわしい〈美女〉よ……

わが純粋な苦は愛おしく あなたの宝は厭わしい。

ナンフ

狂ったひと！…… 神々³⁴⁾に背いた愛を通そうというの

神々から授かった 不幸をもたす美の賜物を
 君の最高の憎むべき 近親相姦に注ぎ込んで
 悲しくも 永遠の法を 歪めようというの……
 この身すべてを捧げたのに 君はそれを蔑むのね
 暁と夜のあいだに いつも変わらず哀れな姿で
 この泉に描かれる いつも孤独な体のために
 私の確かな愛情は 果実すべてを捧げていたのに……
 それなら 心を閉ざすがいいわ…… いまに見てなさい 一斉に
 情け容赦ないナンフたちが 君への愛を歌うから……
 ——ナンフたち〈私〉のもとへ！…… 友の敵を討ちに来て
 藺草や柳から出てきて
 広い野原から それとも
 水の寢床から戻ってきて……
 岩から 木から飛び降りて！
 私のもとにみんなの〈コーラス〉を集めて！
 石の心のナルシスを追い詰めるのよ！
 私の心を拒んだあのナルシスを……
 轟け まばゆい荒波よ！
 こっちへ来て この恥辱を雪げ
 岩壁の罅を解き放つのよ
 卑しめて 追い回し 笑いものにして 怖気づかせるのよ！
 おお 明るい群れのナンフたち
 この私が媚びようとした あの愁い顔のナルシスを。

第4場

ナルシス、ナンフたち、エコー

ナンフたち

ナルシス ナルシス……

エコー

シス シス。

ナルシス

何なんだ この声は？

〈岩〉も〈森〉も なにもかも

ナルシスと言う……

〈岩〉も〈森〉も なにもかも

一斉に口をそろえて
ナルシスと言う……

エコー

シス シス。

ナンフたち

ナルシス ナルシス……
美しくたって何になる？

ナルシス

私だけの美しさだ…… 私の好きにさせてもらおう……

ナンフたち

ナルシス ナルシス
美しくたって何になる？
愛とは 水面に映った
薔薇の影にくちづけを
することじゃないのよ……

ナルシス

愛は自分が望むものだ…… 他人がとやかく言うことか？
私は私が愛したいものを 好きのように愛するだけだ。

ナンフたち

ナルシス ナルシス
人の身をわきまえぬ望み。
用心なさい 美しい手が
柳の枝を手折って
銀の鞭をこなわせて その美しい肩を……

ナルシス

私が何をしたいのか？

ナンフたち

愛してるのよ……

ナルシス

これまで

ただ他人^{ひと}を避けてきた

だけなのだ

愛撫も暴力も 他人^{ひと}から受ける筋合いはない

私には私の望みがある あなたたちのを守るが^がいい。

人間からも神々からも どんな恩も受けたくはない。

ひとり離れて自分を崇め…… まったき私自身となる

究極の心地よさが欲しいのだ

私は私の姿が見たい 何度も見たい……

ナンフたち

水飼い場があればいいのね……

ナルシス

私は私の水に浸る…… このうえなく深い愛³⁵⁾が

わが魂と波のあいだに 幾たびも舞い戻り

この神々しい鏡によって 私の魅力の数々は

わが愛の夢を宿す影に きよらかに回帰する……

ナンフたち

ナルシス ナルシス

君自身しか愛さない君

自分の宝に用心なさい。

自分自身しか愛さない者は

私たちの金の爪に刃向かう……

愛ゆえに美しい 憎しみゆえになお美しい

愛する女は荒れ狂い

死よりもひどい仕打ちをする……

ナンフたち！ なんとしても 日が翳るその前に

泉に映るナルシスを 醜い姿にしまえ！

見る影もない顔に

絶望した顔に！……

エコー

おに…… おに……

ナンフたち

ひっぱたけ！

ひっかけ ひっこなせ……

一挙に仕返しすると清々する
 自分自身の 神々の〈自然〉の 片想いの敵討ち！……

ナルシス

なんと凶暴な……

ナンフたち

報いだ 思い上がった報いだ！……
 涙をながすがいい
 血をながすがいい！
 ずたずたにして分け合ってやる！……
 殴れ 引っ掻け 打ちのめせ！…… ねじあげて かぶりついて 唾
 [を吐け
 鞭打って 打ち据えて 締め上げろ！…… 切りつけ 皮をはぎ 引
 [きちぎれ……

ナルシス

おお わが身の美しさ…… わが肉体…… わが肌……
 ああ なんとこの美の不幸！

ナンフたち

ああ…… ああ…… ああ…… ああ！……
 ナルシス ナルシス……
 恐れと苦しみによって 君は自分を否認するのだ。
 おお 暴力の奇跡 侮辱の威力！……
 君の異様な愛³⁶⁾は 世の中にありふれた
 あらゆる愛³⁷⁾に勝る 君はそう言っていた
 でも 真の愛³⁸⁾は 悲運さえも揺るがせて
 死に至る最期まで 変わらぬ愛を示すのよ……
 彼は黙ったまま！……

ナルシス

いや…… 私は暴力を受けて死ぬのだ 卑劣な水の精たちよ……
 死んでからもこれまでどおり おまえたちを憎んでやる。
 おお 女であるにふさわしいナンフらよ
 どんなに美しかろうが 夢みるナルシスには値しない
 咬み傷ひとつない愛³⁹⁾を 水面に見出す私には……

そうだ この愛しい体の 傷さえも私は愛する
かつてその無傷の美を 崇めたのと同じように。

ナンフたち

私たちに刃向い 私たちを辱め
私たちのなすことを蔑む者め！……

(ナルシスのまわりで騒々しく踊りながら打擲する)

第5場

第1のナンフ⁴⁰⁾、ナンフたち

第1のナンフ

もういい ナンフたちよ 怒りをぶちまけるのはやめて。
そんなに手ひどくしたら あなたたちの優美も台無しよ。
あなたたちの美しさは あのひとの美をいたわらなくては。
あのひとの暴言は 苦しみのために吐かれたものよ。

我を忘れてしまったら 皆そうなるわ。
当然のことじゃない？ 悪意に満ちた手に打たれれば
どんなにかたく閉ざした心も 人間らしく叫びをあげる⁴¹⁾。

ナルシスでさえ堪えかねて！
でももうやめて いまはあのひとに救いの手を差し伸べて
あなたたちを〈あなたたち〉に呼び戻す時！…… さあ行って、
花々のもとへ飛び立って 泣き濡れた彼をここに残して
情け深い〈神々〉は もしナルシスが受け入れるなら
私がナルシスの運命を 和らげるのを望んでいる……
さあ行って いろいろな喜びのなかに消え去って！……
森にはきっと〈ミューズたち〉がいることでしょう
いまごろはみんな一緒に溶け合っているわ
歌うお方⁴²⁾ も 詩を詠むお方⁴³⁾ も
踊るお方⁴⁴⁾ も このお方がいちばん幸せね！……
あなたたちの愛の気まぐれを吹き払ってちょうだい
宇宙⁴⁵⁾ を摘みとる〈ミューズたち〉がそうするように……

(ナンフたち退場)

第6場

ナルシス、ナンフ

ナンフ

ナルシス……

ナルシス

いや。

ナンフ

ナルシス 聞いて……

ナルシス

誰だ 私を呼ぶのは？

誰であれ 消え失せろ！…… 神々⁴⁶⁾ も人間も厭^{いと}わしい。
私はたったひとりで生きてきた 私以外を欲することなく。
ナンフらは殺さんばかりに私を打った…… なぜ？
私が何をした？ 誰に？ なぜナルシスを痛めつける？
みずからの美しさゆえに 犠^{いけにえ}牲となる定めなら
せめてこの世にまたとない 祭壇を立ててくれ
そこでとどめの一撃に この完璧な体をくれてやる……

ナンフ

胸が張り裂けそう…… 君がそう訴えるのも無理ないわ……
ああ どうか その痛々しい傷を私の手で洗わせて
そっと触れるから この指で…… この友情を許してね。
私の目を避けないで 憐れみでいっぱいの眼差しを
どうかこの誘いを嫌がらず 私の方を向いてちょうだい
君に傷を負わせてしまった 女とはどうか思わないで。
私は自分の確かな魅力に 自信をなくして苦しかったの。
でも聞いて…… 君の明日の運命がかかっているの。
神々⁴⁷⁾ がお怒りなのよ 君が孤独を誇っているから
君は優美なその姿を 大地を飾るその華を
こんなに愛を撒き散らす美を 一体どうしたことでしょう？
君の罪はまわりの心を ちっとも知らずにいることよ。
君は炎とその影を 私の魂に注いだ！
君は そうと知らずに 〈ナンフ〉を〈女〉⁴⁸⁾ に変えたのよ
もの狂おしく君を想い 森のなか青ざめやつれ
愛してやまないひとの名を 風また風に叫んでいたわ
岩までもいつか覚えて こだまを返してくれるほど……
私の血潮が 夜ごと さざめき立てる⁴⁹⁾ この名前

こんなにも甘美な名前 ナルシス…… 香り立つよう
 君はこの名をささやいていた 最愛のむなしいひとに
 そして永遠に純粋な その面^{おもて}を覗き込んでいた
 私には目もくれず 物思わしげな顔つきで。
 恍惚とした君の姿は 燃えてゆらめく私の心に
 完璧な大理石の美の 冷たい侮蔑を示していた……
 どれほど涙に訴えても 不屈の石は揺るがなかった。
 かつては元気な娘だった 私はどんより沈んでしまい
 惨めな気持ちではんやりと 毎日をやり過すだけ……
 忘れることも死ぬことも かなわない身の私は
 この永遠の若さを内心 呪わしく思っていた
 私の胸は 女のように 高鳴っていたというのに！……
 最後には どうしようもなく 君にあたる気力も失せて
 生まれてはじめて私は…… もの思う ようになった！
 奇妙な苦しみ…… 心がわが身を苛もうとする……
 でも神々⁵⁰⁾ はこのような 心の乱れを知りもせず
 ナンフは神々にとって 森の飾りでしかないわ
 ただただ白く美しい それがナンフの運命^{さだめ}なの……

ナルシス

その神々⁵¹⁾ は何が望みだ？

ナンフ

神々は私を声とした。

心して聞くのよ

神々のお告げを思いめぐらし 心の準備をしておきなさい。

神々の手が君の身に 投げかける影が見えるはず。

ナルシス

禍^{わざわい}に満ちた手は たしかに神々の手だ！
 厳^{いひ}めしい怨恨が 神々の掟^{おきて}の魂だ……

ナンフ

お黙り！…… 懲罰^{いさづち}の雷を招かないで
 天全体が君に向かって 海のように^{うな}唸っている。
 苦々しい心の内は 心の奥に秘めかくし
 世^よを統べる〈天の種族〉の 仰せを受けるのよ。

ステイツタス ステイツタス ステイツタス 黄泉の河 黄泉の河 黄泉の河の名にかけて。
 おのれ自身とは別の誰かを 愛により愛することが
 ナルシスにできぬならば ナルシスが望まぬならば
 骨の髄までひとでなし。おのが美により断罪されよ
 その身もその美も ふたたび自然に還るべし
 神の命なり^{めい} 52)。

こうべ 頭を垂れよ ナルシス 暗い天命にうちひしがれて。

ナルシス

おお 〈天の裁き〉…… これほど酷い神々⁵³⁾ の声は
 純粹きわまるわが望みに 侮辱を受けたにちがいない……
 澄みきったわが〈泉〉よ 神々はただ暗い河を
 自分たちの全能の 闇の証とするしかないのだ……
 だが不撓不屈のわが魂は 神々よりももっと偉大で
 もっと素晴らしいのだ わが本質は……

泉よ わが泉よ おお 透きとおった水の墓よ
 君の砂には傷を負った 多くの鳥が埋まっている
 わが魂は君の鏡に 捉えがたいナルシスを映し
 その美の不幸を見つめつつ 痛切な思いをめぐらせる。
 完璧な容姿は 罪ということなのか？
 このうえなく誠実な愛⁵⁴⁾ には 度重なる近親相姦^{アンセスト}
 天に対して一度に贖う^{あがな} 犠牲^{いけにえ}が必要なのか？
 ナンフよ！ この貴い運命の果てに私が
 最後には振り向くなどと 期待してはならない……
 神々を軽んじるのも どうしようもないではないか。
 私は私を愛している。私は私が愛する対象だ。
 もしも私がナルシスを 他者の愛⁵⁵⁾ の犠牲にしたら
 私は一体誰を救うのか 私とは無縁の誰か以外に？
 おお ナンフよ 私はこのうえない危険に瀕している
 私自身を裏切らずに あなたを愛することはできない……

ナンフ

裏切って！…… どうして裏切らないの そのナルシスを？
 いつまでも君の正気を奪う その眼差しを断ち切って
 水面から目を逸らしたら 目も和らぐというのに？
 見て 裏切りにぴったりの なんて美しい夕べだこと！

メモリアルフィーズ

滅びゆく日の神の 天翔ける 変容
 金色の灰が降りそそぐ 万物の形のうえに
 誇り高い太陽も いまやなけなしの薔薇となり
 地平線に滅びゆく……

君の最愛のひと 黒々とした枝影に消え
 もうまもなく暗闇に 身をさらす君の泉には
 はやくも夜の宝石が おぼろげに見えている。
 天高く 燦めく光が 〈宇宙〉の存在を告げ
 その凄まじい 〈数〉は 神々⁵⁶⁾にも疎ましいほど……
 でも刻々と深まる闇は 暗い以上に甘美なもので
 夜のダイヤモンド以上に 欲望に満ちあふれ
 芳香と魅惑とを 惜しみなく振り撒いている
 夢まぼろしを 切なさを 暗闇の約束を
 恋人たちの足音がふいに途切れる瞬間を。
 生暖かく吹く風に 夜の思いの丈を打ち明ける
 ナイアードたち わが姉妹たちは 水がめの涙の落ちるまま
 指からこぼれるその水を 永遠の彼方に注ぐのよ
 純然たる倦怠を 永久に負わされた
 純潔無垢の身からもれる 冷たい呻き声とともに。
 分からないでしょう ナルシスよ 被造物として生まれた君には
 死ぬことのありえない 絶望がどれほどのものか……
 おお 死ぬことのできる 〈君〉は 不運をかこつことなどないわ
 どんなに過酷な運命も 死すべき身には限りがあつて
 苦しみも肉体と同じく 儂く^{はかな}消えてなくなるのだから。
 でも終わりのない私たち でも永遠の身の私は……
 常しえのこの心は いつまでも君のもの。
 ああ なにもかも溶け合うような こんなに甘美な夕暮れが
 君に恋のため息を 吹き込んでくれたなら
 君は私に应えてくれて 花となる運命⁵⁷⁾を免れるのに……
 君はその夢の不幸を もう汲み尽くしたのではないの？
 森の恐怖と官能が 震えているのを感じるでしょう？
 来て…… 私にゆだねて その実りない優美なからだを
 思ってもみて いまはもう私を嫌う時ではないのよ
 ナルシス どうか誘われるまま 君自身を裏切って……

ナルシス

ナルシスは自分だけのもの このまま変わらず息絶える。

ナンフ

死にたいというのなら 私のからだをお墓にして！……
 君の目のその眼差しを この胸もとに埋めに来て
 君自身からも神々⁵⁸⁾ からも 逃れてこの腕にやって来て！

ナルシス

ナンフ だめだ…… ナンフ だめだ…… 私を救い出そうという
 君の思惑に乗りはしない。
 〈天〉が私を試すつもりなら
 〈天〉の罪がことごとく 成し遂げられるがいい……
 だが おのれ自身とは別の誰かを 愛により愛することなど
 ナルシスにではしない ナルシスは望まない。
 暗い天命に はっきりと打ち明けよう
 「愛している！」 とささやく相手は自分だけ
 見せかけの眼差しでも かまいはしない。
 ナルシスを このうえなく脅かすのは
 変わることにできない 他人の心……
 でも聞いてくれ 危険な誘惑よ

おお〈震える〉 おお〈優しい〉⁵⁹⁾
 神々しい森の精よ
 あなたの声のその音色を
 耳にするのは嫌ではない
 あなたの魅力は嫌ではない⁶⁰⁾。
 でもあなたの目に浮かぶ
 涙のほうが
 私にはずっと好ましい……

たとえ 猛々しい色に染まる
 〈蒼天〉の暗い〈主たち〉が
 傲りを捨てないナルシスの
 命を奪おうとしてもむだなこと
 たとえ雷に物を言わせようと
 この身を消して花にするぞと
 脅すとしてもむだなこと
 その運命も悪くはないだろう
 時おり君が私を吸ってくれるなら
 かぐわしい影は涙を待とう……

さらば わが〈魂〉よ いまや眠りに落ちるとき
 時はついに その変容の終わりに達して
 力尽き 気高く移ろう姿も消えて……
 そして〈美しい体〉よ さやかな〈波の偶像〉よ
 いまや あなたの この世最後の日がここに
 清らかなものは ただ世の刹那を飾るだけ……

(彼は消える)

最終第7場⁶¹⁾

コーラス

ナンフたち 生き生きとしたナンフたち 等々。

第1のナンフ

〈波の薔薇〉……

コーラス

むなしい！…… むなしい！……

第1のナンフ

〈孤独〉 〈偶像〉 〈沈黙〉……

コーラス (メッザ・ヴォーチェ)
 (声量をおさえて)

彼女はもはや ナルシスの声でしかない。

第1のナンフ

ナル シス…… ナル シ ス！

あるナンフ

おお 生暖かく深い〈夜〉
 星影ひとつ水面に映り 〈波〉の姿が浮かび出る。
 森のほうへ惑わし誘う この妙なる香りは何かしら？
 そのせいで胸が高鳴る そのせいで声がふるえる……
 デリス デリス
 悦び 悦び……

コーラス

デリス
 悦び……

等々。

註

- ＊）本稿は「JSPS 科研費：課題番号 21K12962」の助成を受けた研究の一部である。
- 1) 宇佐美斉「韻文詩翻訳の二つの可能性——上田敏と柳澤健による LE BATEAU IVRE 翻訳の試み」、『人文學報』第 72 号, 1993 年 3 月, 1-38 頁参照。
 - 2) 中地義和「韻文口語訳の音楽——ランボー「陶酔の船」*Le Bateau ivre* を例に」, 『翻訳者たちの挑戦』, 澤田直・坂井セシル編, 水声社, 2019 年, 268 頁。
 - 3) 『定本 上田敏全集』第 10 巻, 教育出版センター, 1981 年, 16-40 頁参照。
 - 4) Paul VALÉRY, *Œuvres*. Édition établie et annotée par Jean HYTIER, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1957-1960, t. II, p. 637.
 - 5) 上田敏が『海潮音』「序」において示した翻訳姿勢はこの点で今日なお示唆に富む。「高踏派の壮麗體を譯すに當りて、多く所謂七五調を基としたる詩形を用ゐ、象徴派の幽婉體を譯するに多少の變格を取てしたるは、其各の原調に適合せしめむが爲なり。」「而も彼所謂逐語譯は必らずしも忠實譯にあらず。」「定本 上田敏全集」第 1 巻, 1978 年, 25-28 頁。
 - 6) 新訳を試みるにあたり、伊吹武彦訳「ナルシス交声曲」(『ヴァレリー全集』第 1 巻, 筑摩書房, 1973 [1967] 年) を参考にした。原詩はプレイヤッド版『全集』(VALÉRY, *Œuvres*, éd. citée, t. I, pp. 146-168), 新版『全集』(VALÉRY, *Œuvres*. Édition, présentation et notes de Michel JARRETY, Paris : Librairie Générale Française, coll. «La Pochothèque», t. III, pp. 403-421), ポッシュ版『詩集』(VALÉRY, *Poésies*, Paris : Gallimard, coll. «Poésie», pp. 161-188) などを参照。
 - 7) 原詩に詩行数を付しているのはジャルティ編集の新版のみだが、詩行数の振りがたは正確ではない。
 - 8) 唯一の例外は、第 4 場のナンフたちの台詞「殴れ 引っ掻け 打ちのめせ! …… ねじあげて かぶりついて 唾を吐け」(«Frappe, griffe, cogne!... Et tords et mords et crache.»)。この詩行は通常の数え方では 11 音節詩句となるが、cogne の *e* muet を母音省略せず、この 6 音節目の *e* に破格的に強勢を置いて読む (cognE Et [kɔnø e]) ことも不可能ではなく、破格的な 12 音節詩句ともみなしうる。いずれにせよ、ナンフの暴力性をリズムの上でも喚起する表現的な詩句である。
 - 9) 齋藤磯雄訳『ボオドレエル 悪の華』, 三笠書房, 1950 年; 井澤義雄訳『ヴァレリー詩集』, 彌生書房, 1964 年を参照。
 - 10) Voir VALÉRY, *Mélange de prose et de poésie. Album plus ou moins illustré d'images sur cuivre de l'auteur*, Paris : Les Bibliophiles de l'Automobile-Club de France, 1939.
 - 11) ただし、1942 年に刊行されたロール・アルバン＝ギヨによる写真を添えたアルバム『ナルシスのカンタータ』では、定冠詞付きのタイトルが掲げられている。Voir VALÉRY, *La Cantate du Narcisse, vingt images photographiques de Laure Albin-Guillot*, Paris : Arta, 1942.

- 12) 「台本」という語と「ジャン・ヴォワリエに」という献辞は 1939 年の『メランジュ』初版には見られず、1941 年版以降に加えられた。献辞の相手はヴァレリー最晩年の愛人ジャンヌ・ロヴィトン (1903-1996) の筆名である。
- 13) 『旧詩帖』所収の「ナルシス語る」と『魅惑』所収の「ナルシス断章」のこと。前者は 1891 年「ラ・コンク」誌に掲載後、改変を経て 1920 年『旧詩帖』所収。後者は 1919 年から 1923 年にかけて各部別々に雑誌発表され、1926 年『魅惑』再版において現在見る全 3 部構成となった。
- 14) 初版では単に「ナンフたち」。
- 15) 初版では「森のなかの明るく開けたところ、〈泉〉」。
- 16) 初版では「〈姉さんたち〉」(頭文字大文字の Sœurs)。
- 17) 初版では「〈君〉」(頭文字大文字の Toi)。
- 18) 初版では「〈ただひとり〉」(頭文字大文字の Seul)。
- 19) 初版では「君」(全大文字の TOI)。
- 20) 同前。
- 21) 初版では「私自身の愛の掟に従うのみ (À la loi de mon propre amour)」であり、この詩行のあと 1 行分の行白あり。
- 22) 初版では「美」(小文字)。
- 23) 初版では「私の目によって君の目に (Par mes yeux dans tes yeux)」。
- 24) 初版では「何か言ってくれ」(小文字)。
- 25) 初版ではこの詩行のあと 1 行分の行白あり。
- 26) 初版ではこの詩行の前に「カンタービレ (*Cantabile*)」という指示がある。
- 27) 原語は ta puissance maitresse であり、「司る」と訳した maitresse には「情婦・愛人」の含意も読み取れる。
- 28) 初版では「光」(小文字)。
- 29) 初版ではこの詩行の前に「アリア (*Aria*)」という指示がある。
- 30) 同前。
- 31) この詩行以降の 20 行余りにおよぶ詩句のタイプ原稿(決定稿の第 131-153 行に相当する詩句でかなりの異同を含む)が、1938 年 8 月末のジャン・ヴォワリエ宛の手紙に添えられている。Voir *Lettres à Jean Voilier*, Paris : Gallimard, 2014, pp. 55-56.
- 32) 初版では「愛」は異例の女性単数形 une amour であったが、1941 年版以降、通常の男性単数形 un amour に変更される。
- 33) 「混じりけのない愛 (une amour sans mélange)」は女性単数形。
- 34) 初版では「〈神々〉」(頭文字大文字の Dieux)。
- 35) 「このうえなく深い愛 (L'amour la plus profonde)」は女性単数形。
- 36) 「君の異様な愛 (ta singulière amour)」は女性単数形。
- 37) 「あらゆる愛 (Toutes les amours)」は女性複数形で、一般的な用法。
- 38) 「真の愛 (l'amour véritable)」は女性単数形(次行の elle で受けられる)。
- 39) 「咬み傷ひとつない愛 (une amour sans morsures)」は女性単数形。

- 40) 初版では他の章と同じく *La Première Nymphe* という表記だが、1941 年版以降この章においてのみ *La Prime Nymphe* と表記が変わる。「第 1 の」という意味を強調したものと思われる。
- 41) ヴァレリーはこの 2 行 («*Quoi de plus naturel ? Sous de méchantes mains / Le cœur le plus fermé s'éclate en cris humains*») を 1939 年 5 月 24 日ジャン・ヴォワリエ宛の手紙に記している。Voir *Lettres à Jean Voilier*, éd. citée, p. 104.
- 42) 原語は *l'une* で、初版では頭文字大文字 (*l'Une*)。
- 43) 原語は *l'autre* で、初版では頭文字大文字 (*l'Autre*)。
- 44) 同前。
- 45) 初版では「〈宇宙〉」(頭文字大文字の *l'Univers*)。
- 46) 初版では「〈神々〉」(頭文字大文字の *Dieux*)。
- 47) 同前。
- 48) 原語 *Nymphe* [nɛf] と *Femme* [fam] は音韻上も響きあう。
- 49) 原語 *bruire* (音を立てる) の他動詞的用法は破格。
- 50) 初版では「〈神々〉」(頭文字大文字の *Dieux*)。
- 51) 同前。
- 52) この神託の部分は全大文字表記で、初版ではさらに赤字で印刷されている。
- 53) 初版では「〈神々〉」(頭文字大文字の *Dieux*)。
- 54) 「このうえなく誠実な愛 (*la plus sincère amour*)」は女性単数形。
- 55) この「他者の愛 (*l'amour étranger*)」(ナルシス自身とは無縁の愛) は男性単数形。
- 56) 初版では「〈神々〉」(頭文字大文字の *Dieux*)。
- 57) ナルシスは死後、水仙の花と化したという変身譚を踏まえる。
- 58) 初版では「〈神々〉」(頭文字大文字の *Dieux*)。
- 59) 初版ではこの詩行の前に「アリア (*Aria*)」という指示がある。なお、1940 年 6 月推定のジャン・ヴォワリエ宛の手紙末尾にこの詩句の出だし (*Ô palp...*) が記されており、さらに 1945 年 4 月 24 日の手紙では、ヴァレリーは 2 行目の「神々しい森の精 (*Divinité des bois*)」を「神々しい私のひと (*Divinité de Moi*)」に変奏している。Voir *Lettres à Jean Voilier*, éd. citée, p. 202 et p. 478.
- 60) 原詩は *Je ne hais point vos charmes* であり、コルネイユ『ル・シッド』の一句「行って、あなたのことが嫌いじゃないから (*Va, je ne te hais point*)」(第 3 幕第 4 場、ロドリグに対するシメヌの有名な緩叙法) の反響を読み取る解釈がある。Voir VALÉRY, *Poésies*. Présentation par Jean-Michel MAULPOIX, Paris : Flammarion, 2018, p. 237.
- 61) 初版は第 6 幕まで、第 7 幕が加筆されたのは 1941 年版以降である。